

# 世界史教育におけるハンザ商人像の導入

—フェッキンフーゼン家の書簡を通して—

宇都木 修 一\*

## 1 はじめに

生徒からの質問や感想に「それはどこの国?」, 「そんな国もあるんだ」というものがある。現在の歴史教育では歴史を教えるのにまず国家単位で教えているのである。これは歴史教育に限ったことではない。私たち自身、普段何気ないところで国ごとに物を見てしまっているのである。しかし、世の中には国家という単位では捉えきれないものがたくさん存在するのである。また、国家単位で歴史が教えられていくとその国家を支配した権力と支配構造が中心になってしまい、歴史の授業は権力と支配構造とそれに対する反乱の歴史で終わってしまうのである。国際化が急速に進む今日の社会で相手の国を理解するにあたり、その国の権力の歴史を知っているだけでは適切なコミュニケーションはとれないだろう。そのために知るべきは文化であり、宗教であり、生活なのである。このようなことから国家単位の歴史観から一歩先へ踏み出した歴史観をもたせることのできるような授業が必要であると言える。

ドイツ・ハンザ商人をテーマに取り上げた理由は北海・バルト海商業圏をヨーロッパの中で地中海商業圏に対するものとして捉えさせたいからである。従来の中世ヨーロッパ商業史の学習では地中海が中心になっており、北海・バルト海商業圏は軽視されてきたと言える。

これは中世に限ったことではない。現在でもEUの中では、2010年までに地中海自由貿易圏をめざすなど、北アフリカや中東諸国と新しい協力関係を作り上げることに南ヨーロッパ諸国が動きだしている。バルト海諸国は冷戦時代には鉄のカーテンが影を落としており、旧ソ連側の国々(ロシア、ポーランド、バルト三国)と北欧の中立諸国(スウェーデン、フィンランド)、そしてNATO加盟国(ドイツ、デンマーク、ノルウェー)に分けられていた。しかし、冷戦終了後、この分断の海にも変化が見られるようになった。1996年の5月3～4日に昔のハンザ同盟の一大拠点であったゴトランド島(スウェーデン領)でバルト海近隣の11か国が集まるバルト海首脳会議が開かれた。この会議では、民主主義の浸透、自由貿易圏の創設、環境保全などにおける地域協力が強調された。この会議はスウェーデンが主催したもので、EUが南や西に偏らないように北側が動き出したといえる。

このようにバルト海地域の再編がなされている中で、過去において北海・バルト海商業圏が存在したことを認識しておくことは必要であろう。特に14～15世紀においてドイツ・ハンザが活躍した地域はリューベックを中心に中世低地ドイツ語を日常語とした地域であり、この言語が国際語として通用していた。このようなことから、ヨーロッパを見る視点として地中海文化圏ばかりでなく、北海・バルト海文化圏に注目し、その相互関係からヨーロッパを捉えることが望ましいと思われる。

更に、現在、「世界史」という科目は必修となっているが、そのため必ずしも歴史が好きな生徒ばかりが学習しているわけではない。歴史嫌いな生徒では中学校段階での知識はほとんど身に付

\*栃木県立宇都宮南高等学校

いていないとも考えられる。このような生徒に対して「世界史」を教えていくには、既存の知識に基づいた授業だけではなく、人々の生活に基づいた授業が必要と言えよう。学習指導要領の世界史Bの内容の取り扱いに関する注意事項に、「各時代の人々の生活や意識を具体的に理解できるようにし、政治史のみの学習にならないようにすること」と記されている。しかし、実際には政治史を構造的に学習させることが多く、その時代の人々がどのような生活をし、何を考えていたかは生徒には見えてこないのである。つまり、生徒が暗記した歴史用語は言葉として頭に残るに過ぎず、イメージとしては残らないのである。あるいは誤ったイメージを残すこともありうる。

その時代のイメージをできる限り正確に残すためには文献史料を読み取らせるのが最も適当であると思われる。しかし、その文献史料も難解なものは適当でない。だれが読んでもわかるものでなければならない。つまり、書簡や日記が最も適当であると言える。書簡や日記はその時代の人々が何を考え、どのような暮らしをしていたかを克明に残してくれている。つまり、生徒は書簡や日記の作者を通して、歴史を追体験できるわけである。

しかし、「世界史」において書簡や日記が使用されることは決して多いとは言えない。その使用も近現代史に偏っていると言える。教科書などに掲載されている文献史料はほとんどが政治家の言葉や法律である。近現代史では新聞記事などが入ってくるが、書簡や日記はない。書簡や日記は個人が記したものであって、普遍性にかけるという批判もあるかもしれないが、その欠点は教師の使い方次第で補える。「日本史」では別冊の史料集も数多く出版されているのに対して、「世界史」は文献史料にばらつきがあると言える。特に近現代以前の時代では文献史料が少なくなるため、極めて表面的な歴史学習に終わりやすい。本来ならば、遠い時代であればある程、その時代の生活や考え方を知る上で、文献史料の利用価値があるのであり、書簡や日記も利用されるべきであると思われる。筆者がここで取り上げる中世ヨーロッパについては、アイリーン・パウアの『中世に生きる人々』を始めとして様々な社会史の著作が出ている。このような著作を利用して中世ヨーロッパの授業内容を豊かにする事は有意義であると言えよう。ここではドイツ・ハンザ商人のヒルデブラント・フェッキンフーゼンの往復書簡を利用してみたいと思う。この商人とその周りの人々の書簡からこの時代の商人に関する様々なテーマを有機的に結びつけて、中世ヨーロッパ社会全体を把握できるようにするのがねらいである。

このテーマの授業を「世界史B」の年間計画の中で位置付けるならば、学習指導要領に基づけば〔(4)ヨーロッパ文化圏の圏の形成と発展〕の中の「ア 東西ヨーロッパ世界の形成」と「イ ヨーロッパの変革と大航海時代」にまたがる部分となる。「十字軍とその影響」について1時間の授業をした後、「商業の復活と中世都市の発展」について1時間で扱い、その後「都市の自由と商人の日常」(1時間)というテーマで商人の日常から中世都市の生活を理解させたい。単なる主題学習ではなく、「十字軍とその影響」から中世都市の発達への展開が時代の流れを追う縦軸ならば、2時間目の「商業の復活と中世都市の発展」はその時代を空間的に見る横軸であり、商人の日常を扱う3時間目はその時代の日常性を見る高さの軸であるといえる。このような位置付けによって、この時代に対してより豊かな理解を得させることができると考えられる。

## 2 フェッキンフーゼン家の往復書簡

ヒルデブラント・フェッキンフーゼンの書簡はヴァイルヘルム・シュティイーダ氏によって1879年にレヴァルの文書保管所でその大部分が発見された。また、彼は同じ文書保管所でヒルデブラント・フェッキンフーゼンの商業帳簿も見つけている。彼の編集したHildebrand Veckinchusen. Briefwechsel eines deutschen Kaufmanns im 15. Jahrhundert, Leipzig, 1921. は長年のフェッキンフーゼン研究の集大成というべき作品である。この書簡集には1400～1425年までの約600通の書簡が収録されている。内容は書簡だけでなく、遺書や債務証書などで補足されている。この種の書簡はハンザ商業圏ではそれほど発見されておらず、ヒルデブラント・フェッキンフーゼンの書簡は他の書簡を大きく引き離して分量が多く、その量とシュティイーダ氏の研究のおかげでこの商人はハンザ商人の中で最もよく知られた人物の一人となっているのである。

書簡の中で最も多く登場する人物はヒルデブラント・フェッキンフーゼンとその兄のジーヴェルト・フェッキンフーゼンである。ヒルデブラントはその生涯の後半をほとんどブリュッゲで過ごしている。一方、ジーヴェルトはケルンにいたことが多かった。そのため、この二人の書簡はほとんどがケルンからブリュッゲへ送られたものである。商用のものがほとんどだが、縁談の話や、子供の教育の問題など家族や親類のことが数多く見られる。このような私生活の問題は彼等の書簡の一番最後に書き残されるのが普通である。多くは署名の後に書かれており、それは日本の手紙であれば、追伸にあたるようなものである。このように近況を知らせることができるのは、紙と時間に余裕のあるときだけであったようである。そして、この書簡の中にはその当時のハンザ諸都市の政治的な側面についてはほとんど書かれていない。ジーヴェルトがリユーベックの闘争に巻き込まれ、ケルンに亡命しているが、この闘争の内容自体は書かれていない。彼等は、ハンザ諸都市の中では比較的裕福であっただろうが、参事会員になることはなく、市政に参加することはなかった。特にこの書簡がやり取りされていた時期は、商業活動が主だったようである。よって、政治に関する事柄はほとんど見られないわけである。

この当時の情報伝達の速さはかなり遅かった。その上、出した手紙が全て相手のところに届くかといえば、そうではなかった。季節や天候、政治的状況などによって配達のスPEEDは大きく変わったのである。ケルンーブリュッゲ間の一般的な所要時間は6～8日と推定されているが、15日もかかる場合があり、届いたときにはすでに手遅れになってしまったような商業取引もあったはずである。そのため、商人たちはあらかじめ、同じ内容の手紙を数人の使者に頼んでいたとされている。<sup>1)</sup> 彼等のような手紙を運ぶ使者がいたおかげで、商人の取引も一か所に定住したまま行えるようになったわけである。ヒルデブラントとジーヴェルトの取引範囲は手広く、ヴェネツィアにまで仲間がいた。彼等の書簡を見る限り、ブリュッゲ、リガ、リユーベック、ケルン、フランクフルト・アム・マイン、アウグスブルク、そしてヴェネツィアの間は、彼等の情報がよく行き届いていたようである。ジーヴェルトは、自分の息子のコルネリウスについて次のように言っている。「私はコルネリウスからあなたの商品のことでたくさんの手紙を受け取っています。私が思うに、彼はもっとたくさん情報をあなたに書いてよこすべきです。(ic hebbe Kornelys vele screven van juwen dyngen. Ic meyne, hey sole ju mer beschedes scryven.)」<sup>2)</sup> コルネリウスはその当時、ヴェネツィア貿易に携わっていたが、どんな商品の需要があるのかヒルデブラントに知らせるのを怠ってい

たようである。もしくは、手紙が配達途中で紛失していたのかもしれない。いずれにせよ、取引において情報の量が重要であったことを示している。また、手紙は情報をもたらすということで重要だっただけでない。商人は手紙がたくさん自分の下に来ることで周りからの信用を得ることができたのである。つまり、多くの都市に知り合いがいるということはその商人にとって信用を高めることになり、自慢できることだったのである。

### 3 フェッキンフーゼンの往復書簡に見られる商人の日常

#### (1) ハンザ商人の結婚観

ヒルデブラントもジーヴェルトも2度結婚している。ヒルデブラントは最初、ドルトムント市長の娘と結婚し、2回目はリガの富豪の娘と結婚した。2回目の結婚は兄ツェーザルの勧めによる結婚である。ツェーザルは書簡の中でこの富豪エンゲルブレヒト・ヴィッテの娘を「美しい乙女 (ene suverlike juncvrouwe<sup>3)</sup>)」と言っている。しかし、その後の手紙の内容を見ると容姿の美しさは結婚にあたってそれほど重要でないことがわかる。「彼は乙女と一緒に200グローテンと生活費及び衣類をあなたに与えるつもりです。さらに、乙女につけてあげるのが習わしになっている装飾品や花嫁道具も彼は当然、彼女につけてやることでしょ。だからこれはいい話だと私たちは思います。(he di wel gheven met syner dochter 200 gr. unde kost unde cleder. Unde wes eme vorder bord to donde an cleynoden unde an ingedome als men ener juncvrouwen pleghed mede to ghevende, dat wel hey er vullenkomeliken mede gheven. Unde uns duncked, dat dit gude weghe sin...<sup>4)</sup>)」ここから、花嫁についてくるもの、いわゆる持参金が多ければ多いほどよいということが窺える。書簡の中では更に、エンゲルブレヒトが娘に100マルクを与えることが記されている。この100マルクは娘に小遣錢 (spelpeninghe)として与えるつもりらしく、普通の持参金とは区別されていた。通常、持参金は嫁いだ娘が自由に使えるわけではなく、夫が自由に使う権利を持っていた。彼女が持参金を自分で手にすることができるのは夫が死亡した場合だけであった。しかし、エンゲルブレヒトは100マルクは彼女に自分から直接渡すと言っているわけである。言わば、エンゲルブレヒト次第と言うわけである。これに対して、ヒルデブラントは次のようなことを書き残している。「この件に同意して、100マルクが私の主人 (エンゲルブレヒト)ではなく私の自由になればよいのだが。(er dat ick to ennyngen dingen volbort gheven wolde, so solden dey 100 marc to mynem wyllen sin, nicht to myns heren<sup>5)</sup>)」ここには少しでも持参金が多いほうがいいという気持ちがよく表れている。実際にはこの100マルクはヒルデブラントに払われることなく、ヒルデブラントはこの後、何度かエンゲルブレヒトの契約違反を非難した。この結果、ヒルデブラントとエンゲルブレヒトの仲は亀裂が生じたままとなり、ヒルデブラントのリガ方面への貿易に影響を残すことになる。

この時代は、結婚は家と家の結び付きと考えられていたため、人々は自分と同じか、それ以上の家に娘を嫁がせようとした。ヒルデブラントの娘を見るとわかることだが、長女のタレケはリューベック市参事会員の家柄のダムメ家に嫁いでいるし、ゲルトルートはリューベック市参事会員のエヴァート・モイエリクに嫁いでいる。ヒルデブラントの姉妹のドゥルデとデデケンもリューベックの一族と結婚している。また、エンゲルブレヒトもヒルデブラントと娘を結婚させたいと言うのに「親戚関係を結びたい (de wolde sich gherne met uns bevunden<sup>6)</sup>)」と言っている。エンゲル

プレヒトとしては当時、リガ市参事会員であったツェーザルの弟と娘を結婚させることによって参事会と関係を持とうとしたと考えられる。このようなことから、この時代の商人たちは仕事においてはハンザなどの組合に基づき、それ以外では家に基づいて暮らしていたということがわかる。

結婚の年齢もかなり低い。マルガレーテは15才でヒルデブラントのもとに嫁いでいる。当時、少年は14歳で成人し、少女は12歳で成人すると考えられていたので15歳という年齢は珍しくなかったろう。アイリーン・パウアー女史はイングランドの11歳の夫と13歳の妻の例などを挙げ、小児結婚について語っている。<sup>7)</sup>それによれば、財産のためや家族間の抗争を終わらせるため、もしくは子供の将来を確実にするために揺籠の中の嬰兒が婚約し、結婚することも珍しくなかったという。ヒルデブラントの娘ゲルトルートの場合、1418年に14歳で結婚しており、その母マルガレーテの例と合わせて考えると、一般的に14～15歳ぐらいが適齢期だったと考えられる。

ヒルデブラントの姉妹の中で唯一、独身なのが修道女のリクセである。彼女がなぜ修道女になったかはわからない。しかし、この時代、一般的に適齢期の娘が片付かなかつた場合、ある程度金額で修道院に入れる傾向があった。「結婚かしからずんば修道院」というのが富裕な商人の娘の人生だったようである。<sup>8)</sup>リューベックのパトリツィアートは市内と近郊の修道院を未婚の娘たちの扶養所と考え、かなりの財産を寄進していたという。リクセのいたツァレンティン修道院もそのような修道院の一つに数えられている。貧しい階層の未婚の女性の扶養所は修道院とは別で、救貧院という施設があった。中世都市では一般に女性の人口が男性よりも多かった上に、リューベックでは300人から400人の男性が聖職者であり、結婚の対象とならなかったため、修道院や救貧院が必要不可欠だったと言われている。<sup>9)</sup>

## (2) ハンザ商人の教育観

次に子供の教育について見ていくことにする。中世ヨーロッパの初期において文字の読み書きができたのはほとんど聖職者だけであった。そのため、彼等は至るところで重宝がられた。商人の間でも12世紀半ばまで聖職者が文書作成で活躍していた。しかし、商人はその仕事の性質上、聖職者に頼ってばかりはいられなかった。そこで、より自由に儲けていくためには自らが文字を習得しなければならないということで、次第に商人も識字能力を高めていくことになった。<sup>10)</sup>この結果、商人に文書主義が行き渡り、定住しても遠隔地取引ができるようになったのである。以下、ハンザ商人が一人前の商人になるまでの一般的なパターンを見て、その後、フェッキンフーゼン家の場合を見ていくことにする。

ハンザ商人の子供は、6歳ぐらいになると地元の教会の教区学校に通った。12～15歳ぐらいにはこの学校を卒業した。一般的に大学に進むものはまれであった。将来、参事会員になりたいという者は法律の知識が必要なので大学に行く者もいた。学校を出ると、親戚の商人の下で修行し始めた。いろいろな国々で過ごす内に、簿記、会計、商品検査、取引方法、貸借業務に関する知識を身に付けていった。2,3年でどこかの商社の使用人になり、主人の代理を務めたり、外地商館で自分の判断で取引をするようになる。使用人のまま一生を終える商人もいたが、チャンスと才能に恵まれた商人は最終的に商社の主人になることができた。<sup>11)</sup>

さて、フェッキンフーゼン家の子供たちはどのような知識を身に付けていたかを見ていくことにする。ジーヴェルトの息子のコルネリウスはヒルデブラントの下で修行し、後に商人として活躍することになる。しかし、ヒルデブラントの息子ヨーストはまったく違った道を歩んでいる。コルネリウスはヴェネツィア貿易で活躍するようになってしばらく経った1426年に、従兄弟にあたるヨーストに会って、次のような感想を残している。「それから彼は手紙を読むことができ。私はそんな人がいるなんて知らなかった。(Auch so en kan er nycht einen bryef lessen, also en weis ich nicht, we men doen sol.)<sup>12)</sup>」ヨーストは商人の息子でありながら読み書きができなかったのである。これより5年程前、彼は1421年末に母親マルガレーテの手に負えなくなり、リフラントの親戚に預けられた。その後、1423年に一時、ブリュッゲのヒルデブラントの所にいたが、1424年にはアーヘンの金細工師のヴィルヘルム・ファン・ベルゲンの下に預けられた。ヨーストはこの金細工師の下に徒弟奉公に入ったのだが、かなり反抗的な少年であったことがわかっている。ヴィルヘルムからヒルデブラントに宛てた手紙の中に次のようなことが書かれている。「どんな少年でも彼ほど多くのいたずらはしなかったし、彼ほど私と養母にたくさんの恥をかかせた者もないでしょう。(中略)彼は養母を殴ろうとし、私に気付かれないように私のことをナイフで刺そうとしたので、私は彼を殴ってしまいました。彼は私を町の役人に訴えるつもりです。(dat noit van niennen jonghen zo vele quaetheit ghezien en was als he doet, noch eennen man zo vele oneeren bewüzet als he mynder moder unde my bewyzet..., .... wül münder moder slaen unde my heimelyken met messen steken unde zettic een hant an hem, hezoude den vohgeden van der stat over my claghen.)<sup>13)</sup>」

彼はこのように徒弟としての生活になじめなかったようである。しかし、文字を学ぼうとしない彼は商人になることはできず、職人の道を選ばなければならなかったのである。金細工師の下への弟子入りを決めたのが父ヒルデブラントの意思か、ヨースト自身の意思かはわからないが、この金細工師がヒルデブラントと商取引で親しかったことは確かである。金細工師は最も高級な加工業であったため、職人の中でも最も身分が高いとされ、多くの者が商人、つまり上層市民に移行した<sup>14)</sup>。そこで、ヒルデブラントも息子を彼の下に預けることにしたのであろう。しかし、この息子はまったく期待に反する行為をし、父親を困らせたわけである。しかも、ヒルデブラントはこの時、債務者収容所にいたのであり、この息子についての苦情を聞いてもどうすることもできなかった。2か月後に同じ金細工師ヴィルヘルムから再び手紙が届いている。「しかし、私はあなたのためにこの件を許しました。というのも、このところの貧しさの中で彼は自分が悪事を働いてきたことに気付いたのです。この貧しさは世の中のどんな鞭よりも彼を改心させました。そこで、私は再び、彼を自分の下に置くことにします。(dit hebbe ic om juven wille vorgheven, want he bekennet in dezer armoet, dat he quaet ghedaen hevet unde dezen armoet hevet hem beter ghewezen dan al die roden van der weerelt ende ic zal hem weder to my nemene.)<sup>15)</sup>」

ここでは、後半、彼が改心したことが述べられている。ここで書かれている「貧しさ」というのは、ヴィルヘルムが腰痛でまったく働けず、家計状況が悪化していたことと、ヒルデブラントが債務者収容所に入れられていたことに関係していると思われる。いずれにしても、ヨーストは少し落ち着いたらしく、この時は親方であるヴィルヘルムからも見捨てられずにすんだようである。しかし、最初に挙げたコルネリウスの1426年の報告では、「あなたの息子ヨーストは、あなたが私

に書いてくれた人物の所にはいず、マラーという人物のところにいました。(daz Joest ur son nychten ist by dem man, als ir myr vorscreven ghegheven haent, er ist by einen Maller<sup>16)</sup>)と書かれており、再び、ヨーストが奉公先を飛び出してしまっていたことがわかる。彼のように理想の道から外れてしまった少年たちはたくさんいたであろう。このような少年がどうなったのか知りたいところであるが、彼がこの先どうなったかはわかっていない。

さて、今と昔で大いに異なっている点は女性に対する教育である。先にも述べたようにこの時代、娘は家の名声を高めるために身分の高い家柄の人と結婚させられた。そこには個人的な感情は一切認められない。一般的に女性は学校に通うことはなく、文字の読み書きはできなかった。読むほうは多少できるようになっても、書くほうは普通できなかった。ところが14世紀末以降、少女の中にも教区学校に通う者が現れる。<sup>17)</sup> ジーヴェルトの娘のグレーテは文字を書くことができた。1414年7月のジーヴェルトの妻リーゼケからヒルデブラントに宛てた手紙は娘が代筆したことがわかっている。「親愛なる友よ、親切にもこの手紙によく目を通して下さい。というのは、私の娘はまだあまり上手に字を書くことができないからです。(Leve bole, doyt wol und overseyt den breyf, de bet wente myn doychter en kan noch nicht woyl schryven<sup>18)</sup>)」この当時、グレーテは9～11歳ぐらいと推定されており、かなり優秀だったようである。ヒルデブラントの娘ゲルトルートも書くことができた。彼女も母親マルグレーテの代筆をしている。このように娘に文字を学ばせたのには、夫の留守中に妻が代理を務めることができるようにすることが狙いだったと考えられている。また、それだけではなく、この筆記能力は嫁資の一つと見なされた。この読み書きのできるゲルトルートはリュウベック市参事会員と結婚しており、ヒルデブラントの思惑通りに育ってくれたようである。

フェッキンフーゼン家の数人の子供達を見てきたが、それぞれが、家を中心に教育されており、家のために生きていたと言える。都市に生きる人間が他者との関係が稀薄で個人を単位にして生きているというのは、今日の社会であり、中世の都市においては村社会的な人間関係が見られるのである。このような血縁関係は中世の都市生活を考慮する上で忘れてならない一側面である。

### (3) キリスト教に対する信仰心と商業活動

最後にこの時代の商人の信仰心と商業活動の関係を見ていくことにする。この時代の信仰心を見る上でまず巡礼を取り上げてみる。ハンザ商人に最も人気のあった巡礼地はアーヘンである。アーヘンには聖母マリアの聖遺物があったためである。フェッキンフーゼンの書簡にもよく出てくる巡礼地である。この他にアルザスのタン、スイスのアインジューデルン、ローマ、サンチャゴ・デ・コンポステラなどがあった。1441年に書かれた『奇跡の書』では聖テオバルトの起こした奇跡と巡礼に関する話が伝えられている。まず、その話から見ていくことにする。

「あるリュウベックの若い商人が商用で海を渡って来た。彼は海賊に遭遇してしまった。海賊たちは彼を捕まえ、彼の持ち物を全て奪い取り、名誉ある人々から借りていた300グルデンまでも奪い取ってしまった。そこで、彼は聖テオバルトに祈った。海賊から逃げることができ、名誉ある人々から借りていたお金を返すことができますように、と。彼は供え物を持って聖テオバルトの下、つまり、タンへ行くことを誓った。すると彼はすぐに海賊から逃げる事ができた。そこで彼

は聖テオバルトに右手をあげて誓った。もし、私が誓いを実行せず、年内に供え物を持って巡礼に行かなかったならば、その時は聖テオバルト様が私を疫病にかけてもかまいません、と。しかし、彼は期日までに誓いを果たさなかった。その後、彼は成功し、名誉と富の両方を手に入れていた。そして、借金を全て返してもまだたくさんのお金が残し、そのお金は彼の必要を全て満たすのに十分なほどであった。期日が過ぎても彼が誓いを果たさなかったその時、聖テオバルトが彼に罰を与え、彼の右手は麻痺した。そして、彼は右手が使えなくなってしまった。その時、彼は恐ろしくなり、誓いを思い出し、旅路についた。すると彼が旅に出るや否や彼の手は良くなった。彼は巡礼の旅をして、できる限り厳粛にこの誓いを果たした。<sup>19)</sup>」

この話は当時の商人の信仰心をそのまま表しているとは言えないが、道徳の一つとして広まっていたと考えられる。名誉と富を手に入れるためには神を無視してはいけなとか、約束は守らなければいけないという理想である。その約束も期日が決まっているところが商人らしい。さて実際の商人はどのようなときに巡礼に行ったのかを次に見ていくことにする。

フェッキンフーゼンの書簡の中にも巡礼に関することがいくつか見られる。特にジーヴェルトがよく巡礼をしている。まず彼は、リュエベックで政争が起こり、ケルンに亡命したときにアーヘンに巡礼に行っている。<sup>20)</sup> 更に、ジーヴェルトは皮膚病を患い、医者がそれを治すことができないときも、スイスのアインジールデンに巡礼に行っている。「ある医者はその吹き出物を切り取ろうとするし、またある医者は内側から(薬で)治そうとする。このことが(私を)不安にさせるので、私はリュエベックに帰りたくなる。しかし、今はまず、アインジールデンの聖母様のところへ行かなければならず、その他のところへは行きません。しかし、途中で寝たきりにならないか心配です。そうになったら私は不安になるでしょう。(Dey mester wellen my den dros utsnyden unde eyn del wellen in vordryven. Dyt es al sorgelyc unde ic were ok gemen to Lubeke. Men ic mot jo eyrst to unser leyven vrouwen to den Eynsedelyngen unde en dar noch nergen wandern unde vruchte, op den wege belyggen to blyven, so weret my sorgelyc;)」<sup>21)</sup> ジーヴェルトはこの手紙の冒頭でヒルデブラントにバルサムの布を少し分けてほしいと頼んでいる。ここには彼の迷信深さがよく現れている。また、彼は冒頭の話のような神への恐怖を感じていたかもしれない。しかし、彼は実際のところあまり悲観的ではなかったようである。この手紙の追伸には珍しく彼の喜びが見て取れる箇所があるのである。「それから、私はツィーゲンハイン伯とある取決めをしました。彼は私に今日から聖マルティンの日までシュトラスブルクのワインを60樽、関税をかけずにケルンに運ぶことを許してくれたのです。それをあなたのところにも置かせます。(Item ic hebbe eyn eynde met den van Segenhagen, dat sey my solen vrygen 60 vorder wyns van Strasborch, went to Kolnne tolvry tuschen hyr unde sunte Mertyn. Dyt latet by ju blyven.)」<sup>22)</sup> 治らないかもしれない病気に罹っても、決して商売のことは忘れていないのである。しかも、この関税免除は秘密裏に行われたもので公認のものではなかった。つまり、アインジールデン詣でに行くのに、一方では関税を裏で免除してもらおうという不誠実とも取られる行為を行っているわけである。

商人の信仰心がよく現れる文書に遺言状がある。商人たちは死に臨んで生前行った不正な行為の許しを得るために、教会や修道院、救貧院などにその罪を償うに足ると思われる額を寄進している。中には豪華な祭壇を寄進したり、自分たちの商社のための礼拝堂を作る者もいた。<sup>23)</sup> ここでは



ジーヴェルトの1406年に作成した遺言状<sup>24)</sup>が残っているのでその内容を見ていくことにする。

遺言状の構成を見ると、大きく3つに分けられる。最初が教会、修道院、救貧院への寄進、次が親戚、友人への遺産の配分、そして最後が妻と子供たちへの遺産の配分である。この3つの分類を比較すると、まず教会関係ではカルトゥジオ会修道院への20マルク・リユーベックの寄進が最高額であり、リユーベックの修道院はそれぞれ2マルク・リユーベックずつ分け与えられており、一番少ない額である。次の親戚、友人関係ではヒルデブランドが200マルク・リユーベックと突出しており、その次に100マルク、60マルク、30マルクと続き、残りはほとんど10マルクずつである。これに対して、妻と子供には定期金が配分されており、当然のことながら前者とは別格扱いである。特に目立っているのは娘の持参金の指定額であり、1200マルク・リユーベックも見積もられている。信仰心は決して金額で計れるとは思わないが、このように見てみると、身内優先、つまり「家」中心の現実的な配分がなされていることがわかる。

ここではジーヴェルトの例を取り上げたが、中世の商人の信仰心は常に商業活動との関係で把握されるべきであると思われる。つまり、商業活動を円滑に行うためにいかに信仰と折り合いをつけていくかが彼等の持っていた問題だったと考えられる。多かれ少なかれ商業には詐欺的側面が含まれており、商人は自分の職業の正当性を証明するためにも教会などへの寄進が必要だったのであり、儲けを得ることの正当性を主張するためにも儲けを神の恩寵と見なしているのである。書簡の中にしばしば現れる神への祈りの文はその表れであると考えられる。ただし、商人の信仰心は職業上、表面的なものであることが多いが、彼等はそれだけに神を意識せざるをえなかったと言えるのであり、一見、現代的に見える彼等だが、書簡の中の神という言葉が示すように中世ならではの考え方を決して逸脱してはいないのである。

#### 4 おわりに

ここまでフェッキンフーゼン家の往復書簡を見てきたわけだが、ここに挙げた極一部からでも当時の商人の世界観を垣間見ることができると思う。このような史料から当時の人々の考え方を理解し、それを今日の私たちの考え方と比較し、どのような点が違うかを認識し、さらにそこからなぜそのような文化が形成されたかに思いを至らせることは歴史を見ていく上で重要であると考えられる。例えば、ハンザ商人の結婚観から中世ヨーロッパの商人の社会が「家」中心の社会であることがわかり、各「家」が親戚関係を中心に商業活動を行い、さらには遠隔地貿易を安全にするためにハンザという団体が形成された。その背景には国家による安全の保障がなかったという点に気付かせれば、中世ヨーロッパの国家がどのようなものであったかを理解させる糸口を与えたことになる。このように中世ヨーロッパを理解させるにあたって、身近なところから掘り下げていくことで生徒の歴史認識の誤りが少なくなり、知識が定着しやすくなると考えられる。これは書簡に限ったことではなく、様々な史料にあてはまることである。実際の授業においては時間数の制限があり、十分な時間が掛けられないということもあるが、重要なことは省略しても生徒の頭の中で広がっていくような史料を提示することであり、重要事項だけを押さえて、それ以上に発展しない知識を伝授することは避けなければならない。提示された史料から自己を相対化できる

ことが好ましいといえる。ここでは具体的な授業構成まで掲載することができず、残念であるが、今後より一層このような授業用史料の開発とそれに基づく授業の開発を試みて行きたい。

【註】

- 1) W.Stieda, Hildebrand Veckinchusen. Briefwechsel eines deutschen Kaufmanns im 15. Jahrhundert, Leipzig, 1921, SS. XVIII-XIX
- 2) Ebenda, Nr.184, S.210.
- 3) Ebenda, Nr.3, S.2.
- 4) Ebenda, Nr.3, SS.2-3.
- 5) Ebenda, Nr.3, S.2.
- 6) Ebenda, Nr.3, S.2.
- 7) アイリーン・パウア著, 三好洋子訳『中世に生きる人々』, 東京大学出版会, 1969年, 193-194頁
- 8) フリッツ・レーリヒ著, 魚住昌良・小倉欣一共訳『中世ヨーロッパ都市と市民文化』, 創文社, 1978年, 101-103頁
- 9) 同上, 102頁
- 10) 高橋理『ハンザ同盟 中世の都市と商人たち』, 教育社, 1980年, 92-94頁
- 11) P.Dollinger, The German Hansa, London, 1970, pp.179-180.
- 12) W.Stieda, a.a.O., Nr.413, S.423.
- 13) Ebenda, Nr.379, SS.396-397.
- 14) フリッツ・レーリヒ, 前掲書, 130-131頁
- 15) W.Stieda, a.a.O., Nr.380, S.397.
- 16) Ebenda, Nr.413, S.423.
- 17) コルト・メクゼーパー, エリーザベト・シュラウト共編, 瀬原義生監訳, 赤阪俊一・佐藤専次共訳『ドイツ中世の日常生活』, 刀水書房, 1995年, 91頁
- 18) W.Stieda, a.a.O., Nr.98, S.116-117.
- 19) P.Dollinger, op.cit., no.25., p.411.
- 20) W.Stieda, a.a.O., Nr.30, S.39.
- 21) Ebenda, Nr.266, S.292.
- 22) Ebenda, Nr.266, S.292.
- 23) フリッツ・レーリヒ, 前掲書, 116頁
- 24) W.Stieda, a.a.O., Nr.9, SS.6-7.